

2022年5月15日 聖餐式説教

復活節も第5主日を迎えました。先週から私たちは聖餐式聖書日課の中で、イエス様のこの世最後の教え、これを決別説教と呼んでおりますが、こちらについて学びを続けています。復活されたイエス様が、私たちに語られたこの世における最後の教えの位置づけで、内容はどれも極めて重要なことです。

本日の福音書の重要な点は、互いに愛し合いなさい、ということです。イエス様がこの世での働きを終えて天にお帰りになった後も、お互いに愛があれば、彼らがイエス様の弟子であり続け、その働きを続けていることを人々が実感することができるというのです。イエス様がこの世を去ってしまわれたらすべてが終わるのではなく、互いに愛し合うことによって、イエス様はいつも私たちの中におられ、私たちの主であり続けると言っているのです。

そしてこれは、弟子たちだけへの教えではなく、時間と距離を超え、すべてキリストに結ばれている人びとへの言葉でもあります。互いに愛し合いなさい、これはとても美しい言葉ですが、それはこの世界に神の国を来たらせるためであると共に、イエス様を中心とした私たちの交わりが永遠に続いていく証でもあるのです。

この聖書の言葉は、聖婚式、結婚式でもよく読まれる箇所です。互いに愛し合うのは本人たちだけのことでなく、イエス様が中心におられ、イエス様がその家庭の主であり、導き手であり、イエス様を証し続けていくことこそ、家族の務めであるのが示されているのです。

本日の旧約聖書代えて読まれた、使徒言行録の箇所に目をとめてみましょう。今日の箇所は、パウロが行った宣教旅行の第一回目、ピシディアのアンティオキアでの出来事です。パウロたちの働きにより、説教が実を結び、多くの人々がイエス様を受け入れ、つながっていきました。パウロたちの喜びはどれだけであったでしょう。当時迫害も少なくなく、名実ともに労多くして実り少ない日々の連続だったパウロたちにとって、神の国につながる人が増し加えられることは、これ以上の喜びはなかったでしょう。

しかし、その働きを一番迫害したのが、ユダヤ人たちであったのに驚かされます。パウロと同じユダヤ人たちが、キリスト教宣教の一番の迫害者であった

のです。彼らは、イエス様を十字架につけた直接の人々でありますし、この箇所のみならず、パウロたちの宣教活動を妨害し続けました。パウロの宣教活動が行われる中で、行く先行く先でパウロたちを追ってきてその活動を妨害し迫害し続けたのです。さらに長い時を経て、ユダヤ人たちは現在も、イエス様をメシアと認めず、エルサレムで固く閉ざされている黄金の門を開いてメシアがやってくると信じているのを忘れてはなりません。その意味でパウロたちへの迫害は、今日でも終わっていないこととなります。

パウロはこうした中で、ユダヤ人へ対する宣教活動を断念し、ユダヤ人以外の人々、聖書の中では異邦人と言われている人たちへの宣教に邁進することになりました。このことを人々がとても喜んだ様子が本日の聖書の箇所に描かれています。自らもユダヤ人であったパウロにとって、ユダヤ人への宣教活動を断念することはまさに断腸の思いであったでしょう。しかし、イエス様につながる人々が一人でも多く増し加えられるために、パウロはユダヤ人ではなく、ユダヤ人以外の人々への宣教活動へ専念することになりました。それが私たち日本への宣教にもつながっています。

互いに愛し合い、イエス様を中心として御心にかなうように生き、目の前にある課題に取り組みつつ、歩み続けること、パウロはその生き方の模範を私たちに示したのです。現代社会において多くの困難の中にあり続ける教会にとって、パウロが示した姿は多くの示唆を与えてくれます。今週はこのことを覚えて、私たちの現代における使命を、黙想のうちに見出していきたいものです。